

### 第3章 史跡の環境

#### 第1節 自然的環境

小浜市は第4図のように福井県南西部に位置し、市域の西・南西は<sup>おおい</sup>大飯郡おおい町、東は三方上中郡若狭町、南・南東は滋賀県高島市、北は若狭湾に接している。海岸部は典型的なリアス式海岸を形成しており、湾内には大小の半島が突出し天然の良港を多く抱いている。

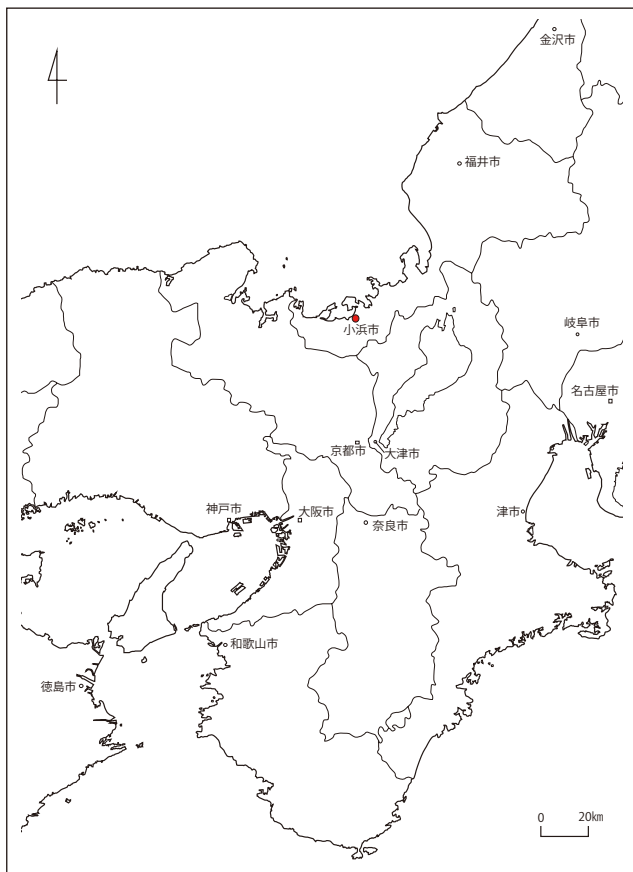
当市は、若狭地方最大の面積を有する小浜平野の中央部に位置している。小浜市街地は、滋賀県の<sup>おにゅうがわ</sup>三重ヶ岳を源流として、松永川、遠敷川等の支流を集めて流れる北川と、京都府との県境より流れる南川の両河川の河口堆積と、小浜湾潮流で形成された砂堆上に展開する。また、市の南側は山並みに囲まれた中山間地域になっている。

後瀬山城跡の所在する後瀬山は小浜地区から今富地区にかけて位置し、少し離れて標高712mの多田ヶ岳が聳える。

後瀬山周辺の地質は、平地部の地質から後瀬山山麓は比較的新しい地質時代まで海に直接接していたことが判明しており、船を繋いだと伝承される岩もある。このことから後瀬山の<sup>かいしよくがい</sup>海側山麓は、海蝕崖が形成されやすい環境にあったと推定される。

後瀬山周辺の地質は『史跡後瀬山城跡保存管理計画書』によると、丹波層群を<sup>がいすいせい</sup>基盤岩としてこれを<sup>けつがん</sup>崖錘性堆積物および沖積層、盛土が被覆している。丹波層群は頁岩・混在岩・チャートから成っている。崖錘性堆積物は、基盤である丹波層群の風化侵食再堆積物であり、主に褐色を呈する礫混り粘性土～礫質土から成る。沖積層は、主に市街地区域の海岸～平地～緩傾斜地を形成している。盛土は八幡神社境内やJR線路敷等である。

後瀬山周辺地域は、『史跡後瀬山城跡保存管理計画書』によると乾性褐色森林土壌で、土壌表層には落葉・落枝の腐植堆積層が発達している。しかしその下位の腐植土（A層）は発達が悪く、腐植物の少ない強風化土（B層）が浅い深度で出現する。このように土壌は肥沃



第4図 小浜市位置図

ではなく、どちらかといえば「やせ地」といえる。尾根は特に土壌層厚が薄く、愛宕神社～山頂の参道はガリ侵食によりB層も欠落しC層(風化土)が地表に露出している箇所も多い。

後瀬山の植物相は、潜在植生的にはスダジイ群団のヤブコウジースダジイ群集が成立する所であるが、伐採などの人為的影響や急傾斜地などの微地形によってかなり複雑な植生が成立している。スダジイ群団の他、クレーコナラ群落、アカマツ群落、落葉広葉樹混生林、スギ・ヒノキ植林に大きく分けることができる。

後瀬山周辺地域の動物は『史跡後瀬山城跡保存管理計画書』によると、ホンドタヌキ、ホンドキツネ、ニホンアナグマ、ニホンイノシシおよびホンシュウジカの生息域となっている。鳥類では、森林性のキジ、カッコウ、ホトトギス、フクロウ、キツツキ、ヒヨドリ、モズ、ヒタキ、ツグミなどが生息している。その他としてカラスやトビも生息している。両生類では無尾目(カエル)、爬虫類ではトカゲ目(ヤモリ、トカゲ、カナヘビ、シマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシ、マムシ)が生息している。昆虫類は南川流域の調査でチョウ目、甲虫目、カメムシ目が確認されている。そのうちチョウ目ではホシチャバネセセリが近畿地方の採取例が少なく貴重な記録である。また甲虫目ではフトノミゾウムシが県内初記載であり、ゲンジボタルの確認も注目される。カメムシ目ではクチナガゲンバイが福井県初記載である。

景観については、後瀬山は自然景観としては優れているとはいえず、歴史文化的背景があつてはじめて一定の価値を有するものであるとされ、万葉集にも歌われた当時のランドマークの山として、そして自然の要害である中世の山城として、また海とともに狭長な市街地平野を挟み込む山としての位置づけになる。

## 第2節 歴史的環境

### (1) 縄文時代～古墳時代

小浜市内において人間の生活痕跡を確認できるのは縄文時代からであり、深野遺跡や阿納塩浜遺跡など海岸部や段丘上に認められる。弥生時代では弥生初期遠賀川式土器おんががわが出土した北川(丸山)河床遺跡や方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼが多く確認された府中石田遺跡などがある。古墳時代では市東部に多くの古墳が築かれ、特に白鬚神社前方後円墳は全長58mを測り、市内最大規模である。

### (2) 奈良時代～平安時代

小浜市域では当該期の遺跡が多く確認されており、特に市東部の遠敷・松永地区に重要遺跡が所在している。遺跡の分布や存続時期、歴史地理的検討から、時代が進むにつれ市東部から西へ向かって土地が開発されていくことが想定されている。注目される遺跡として、若狭国分寺跡にしなわてしもや若狭国府の可能性のある西縄手下遺跡、若狭神宮寺遺跡、木崎遺跡などがある。

### (3) 鎌倉時代

若狭は源平争乱の影響はほとんど受けなかったが、建久7年(1196)若狭国の有力者であった稲葉時定が失脚し代わって津々見忠季が若狭を支配することになる。しかし、承久3年(1221)の承久の乱の宇治川の戦いで忠季は討死し、その跡は若狭忠時が継いだ。

弘長2年(1262)北条時宗が若狭国税所今富名の領主となり、以後北条得宗の影響を強く受けることになる。

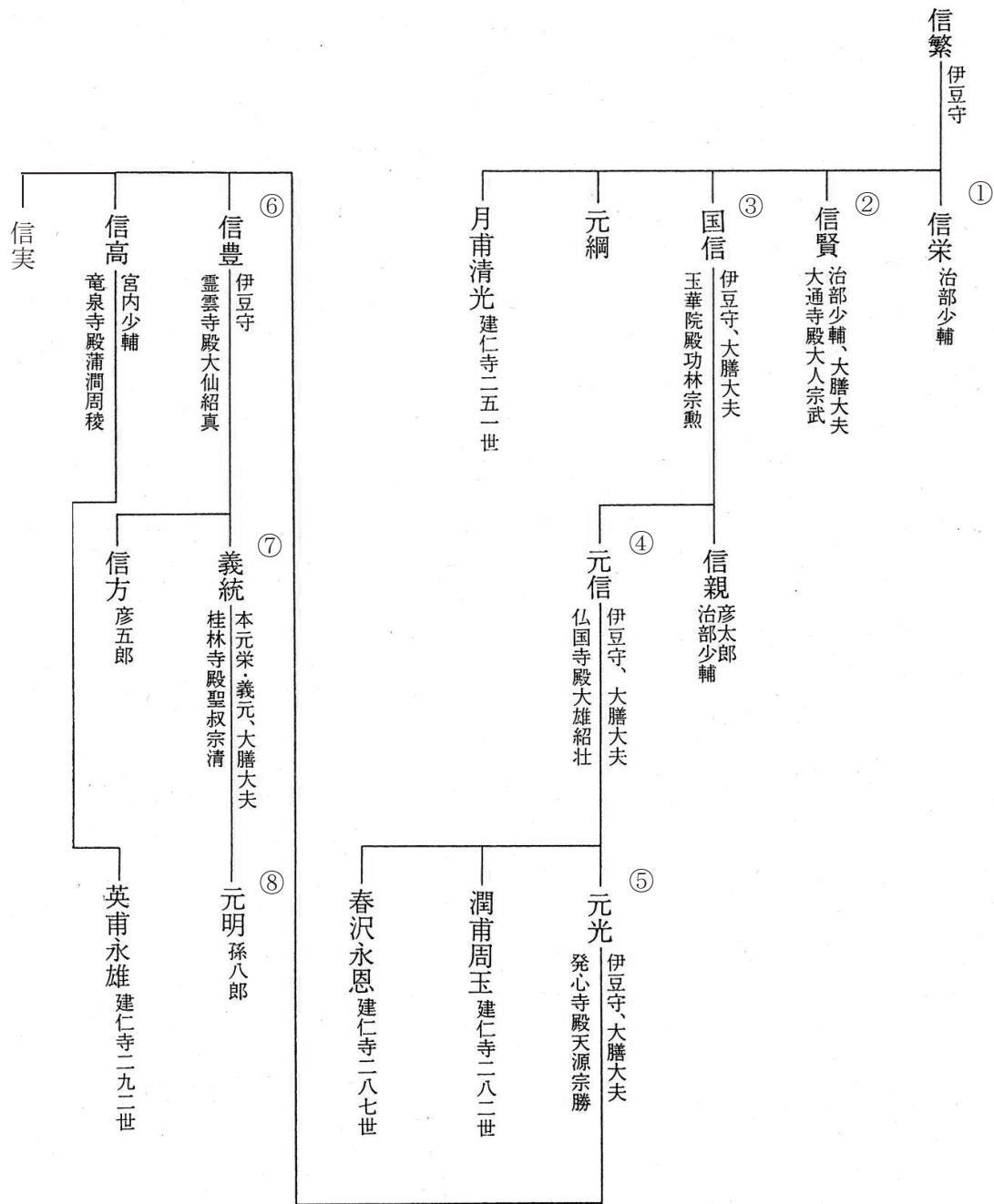
### (4) 室町時代(一色氏統治期)

元弘3年(1333)鎌倉幕府は滅び、建武の新政が開始されるが、早くも建武3年(1336)足利尊氏・直義の軍勢が京都に攻め上がり後醍醐天皇が京を逃れ、南北朝時代がはじまる。同年足利尊氏・直義は建武式目を制定し、北朝となる朝廷を擁した室町幕府が成立した。若狭国守護は南北朝時代の間に斯波・佐々木・大高・山名・細川・石橋など度々守護が交替している。

貞治5年(1366)の斯波氏の失脚にもない一色範光が若狭守護職に任じられ、康暦元年(1379)には三河国守護職も得た。明德2年(1391)の明德の乱に参戦した一色詮範とその子満範は、山名氏清の首を取るという軍功を挙げ、満範は山名氏の遺領の丹後守護職を得るとともに詮範は若狭国税所今富名を与えられた。室町幕府3代将軍足利義満がしばしば若狭に遊覧しており、その際義満の宿所には玉花院が建てられている。応永14年(1407)の旅行では一色満範は義満の妻北山院を玉花院にそれぞれ宿泊させている。栖雲寺は現在の常高寺付近に、玉花院は東光寺に所在したと考えられている。しかし、一色義貫は永享12年(1440)5月、大和の国人越智氏らを討伐するため出陣していた大和の陣中で、安芸分郡守護武田信栄(「のぶまさ」とも)によって殺害された。この事件は、信栄が室町幕府6代将軍足利義教の命を受け実行したものである。これによって一色義貫の所領のうち、武田信栄は若狭国を拝領して若狭守護職となり、丹後国は一色教親が、三河国は細川持常が拝領した。この時から武田氏が若狭国を統治するようになる。

### (5) 室町時代(若狭武田氏統治期)

若狭の守護職は第5図のように、初代信栄以降、信賢、国信、元信と続き、当初は西津の守護所(守護居館)に入ったと考えられる。その後若狭守護武田5代元光は、大永2年(1522)、小浜市街地の南に聳える後瀬山の山上に城郭を築き、北側山麓にあった日蓮宗長源寺を向島に移して居館を建設した。しかし、大永7年(1527)に起きた丹波勢等との京都桂川の合戦では、配下の有力武将が多数討たれるという大敗北を喫し、このことが影響して若狭武田氏の衰退を決定付けたと考えられる。その後も丹後攻略に際して越前朝倉氏に援助を求めた際には、朝倉勢が三方郡内で乱暴を働く等治安が悪化し、さらに丹後の海賊集団が若狭の浦々に来寇したが、この時は在地の武士たちにより何とか撃退した。このような国内外とも問題山積の時に元光は隠居し、家督を子の信豊に譲ることになったが、当時守護を補佐すべき



第5図 武田氏系図 (『小浜市史通史編上』より)

あわや  
 栗屋氏の反発や武田氏一族内の跡目争いが起きるなど決して安定した状態ではなかったようである。信豊の跡職継承はこの反乱を鎮めた天文7年(1538)頃とされ、元光は小浜市伏原の後瀬山の東麓にある発心寺を再興してそこに住した。若狭守護職になった信豊は、幕府の命による近畿への出兵と敗退により、もはや守護としての権威も行き渡らず、被官有力武将をまとめる力を失ったようであり、子息義統(「よしかず」とも)に家督を譲って隠居したようである。しかし、信豊の隠居をめぐって弘治2年(1556)に若狭国内で反乱が発生し

た。この内乱のあと信豊と義統の間で今度は隠居料のことをめぐって対立が起きたようで、信豊は一時近江へ退くなどの事態が発生し、武田氏の一部被官もそれぞれ自らの領地に籠り、守護のもとに出仕しないような状況に陥っていた。この最中の永禄4年(1561)、以前から不穏な動きのあった高浜<sup>さいちやま</sup>碓<sup>へん</sup>導<sup>み</sup>山城主逸見昌経と美浜国吉城主粟屋勝久<sup>あわやかつひさ</sup>らが丹後勢と手を結び謀反を起こしたが、すでに義統には鎮圧するだけの軍事力もなく、縁戚越前朝倉氏を頼んでようやく抑えることができた。このような騒乱の最中義統は永禄10年(1567)没し、跡職は子息の元明(「もとあきら」とも)が継ぐことになるが、もはや盛時の勢いはなく、永禄11年(1568)朝倉義景の軍勢が若狭へ侵攻し、後瀬山城を攻撃し元明を越前へ連れ去った。

### (6) 安土桃山時代(丹羽・浅野・木下氏統治期)

天正元年(1573)丹羽長秀<sup>にわながひで</sup>が若狭を領することになると、国人衆の多くは長秀に従っており、もはや元明に若狭守護の威光はなくなっていたと思われる。元明は朝倉氏滅亡の前後頃に若狭へ帰ったものと考えられ、天正9年(1581)織田信長<sup>おだのぶなが</sup>から高浜逸見氏の旧領の内3千石を与えられ辛うじてその名望を保った。しかし、天正10年(1582)京都の本能寺で明智光秀<sup>あけちみつひで</sup>に信長が討たれるという本能寺の変が起こり、まもなく山崎の合戦に勝利した羽柴秀吉<sup>はしばひでよし</sup>によって光秀が滅ぼされると、元明は光秀に同心したということで近江海津の法幢院<sup>ほうどういん</sup>に呼び出され、天正10年7月丹羽長秀によって生害させられた。これによって初代武田信栄以来若狭を支配した若狭武田氏は滅亡した。

その後、賤ヶ岳<sup>しずがたけ</sup>の戦い等で羽柴秀吉と行動を共にした丹羽長秀はその功績が認められ、これまでの若狭国と近江2郡に加えて、越前国と加賀半国(江沼・能美郡)が与えられ、柴田勝家<sup>かついえ</sup>の居城であった北庄に入城した。しかし丹羽氏の若狭支配は長く続かず、長秀の嗣子長重<sup>ながしげ</sup>が天正15年(1587)島津氏攻撃の際、軍紀違反があったかどで若狭国を没収された。代わりに浅野長吉<sup>ながよし</sup>が若狭を領するようになり、天正16年(1588)若狭一国の検地を実施するなど戦乱のため荒廃していた土地の復興に腐心した。しかし、文禄2年(1593)浅野長吉・幸長<sup>ゆきな</sup>親子は秀吉の命により甲斐国へ国替をさせられ、代わって木下勝俊<sup>かつとし</sup>・利房<sup>としふさ</sup>兄弟が若狭に入部した。兄の勝俊が小浜へ、弟の利房は高浜へ入部している。

### (7) 江戸時代(京極・酒井氏統治期)

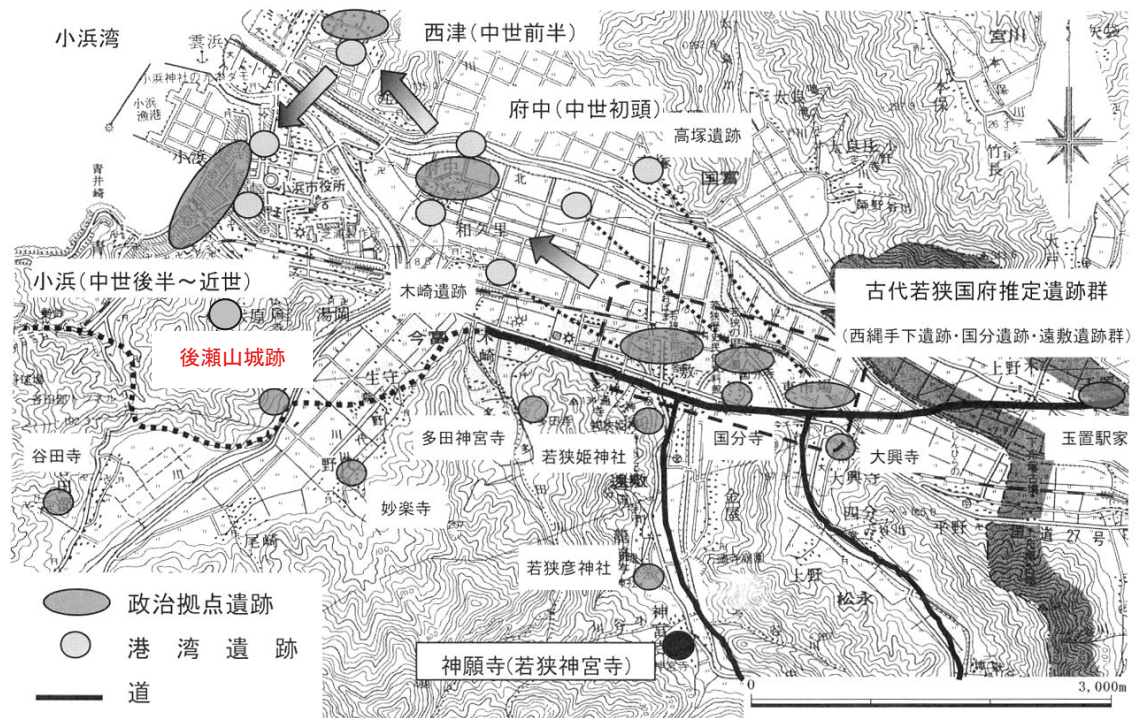
慶長5年(1600)に徳川方と石田方が争う関ヶ原<sup>けいちょう</sup>の戦いが勃発し、木下勝俊は伏見城の留守を任されていたが、勝手に城を離れ北政所<sup>きたまんどころ</sup>の屋敷に入ったため所領を没収された。利房も石田方に属したため同じく改易された。

この関ヶ原の戦いの際、近江大津城の城主であった京極高次<sup>きょうごくたかつぐ</sup>は大津城にて籠城し、西軍の侵攻を遅らせたという戦功によって若狭一国8万5,000石を得た。翌慶長6年(1601)には近江高島のうちで7,000石を加増され領地高は9万2,000石余りとなった。

高次は当初武田氏の築いた後瀬山城に入ったと思われるが、慶長6年(1601)後瀬山城を廃し南川・北川の三角州に新たに小浜城を築城するとともに城下町の整備を行った。しかし、寛永11年(1634)子息忠高は松江に転封となり替わって酒井忠勝が武蔵川越から若狭国に入った。忠勝は元和6年(1620)徳川家光の小姓となり、元和10年(1624)には家光の將軍襲職に先立って老中となり、さらに寛永15年(1638)には大老となった。

忠勝の領地は若狭一国・越前敦賀郡・近江高島郡の内計11万3500石であり、さらに寛永13年(1636)在府料として下野国佐野において1万石を加増され(後に一部は安房へと移される)、領地高は12万3500石となった。2代忠直の代の寛文8年(1668)に兄忠朝の子忠国に越前敦賀の一部と安房の一部を合わせた1万石が与えられて安房勝山藩が成立した。天和2年(1682)に3代忠隆が弟忠綱に越前敦賀と近江高島から1万石を分知して越前鞠山藩が成立、さらに忠根へ3000石が与えられて井川領が分かれ、元禄12年(1699)一部残されていた下野国と安房国の領地が越前国今立郡・南条郡・摂津国に移されるなど若干の変動・増減があった。

江戸時代末期になると12代忠義は京都所司代として安政の大獄に関わり、また、公武合体を進めるため和宮降嫁のため尽力した。王政復古の後、小浜藩は新政府軍より北陸道鎮撫使の先鋒を命じられ、明治になると13代忠氏は隠居し、12代忠義は名を忠禄と改め14代藩主となった。忠禄は明治2年(1869)に版籍奉還をして藩知事に任命され伯爵となったが、明治4年(1871)に廃藩置県が行われ、230年余りにわたって続いた小浜藩は姿を消した。



第6図 拠点の変遷模式図 (『小浜市重要遺跡確認調査報告書Ⅲ』より)

## (8) 小浜城までの拠点の変遷について

若狭国の拠点については、第6図のように変遷したと考えられる。奈良時代・平安時代は小浜市東部遠敷地区から松永地区にかけて広がる西縄手下遺跡が、遺構・遺物の様相から若狭国府の可能性が高いと考えられる。当該遺跡は奈良時代から平安時代後期まで存続する。

その後府中周辺に移り、さらに西津へ移動するというのが元徳2年(1330)「塩浜検注目録」や町割り、古絵図等から想定される。同史料には、西津に「津姫社」、「津寺」、「政所屋敷」、「市屋形」などの記載があり、守護居館の存在を想定できる。この西津の守護居館には一色氏、若狭武田氏が使用していたと考えられるが、大永2年(1522)若狭武田氏5代元光により後瀬山上に城郭が築かれ、山麓に守護居館が建設されたことから拠点は小浜に移った。この守護居館は若狭武田、丹羽、浅野、木下の歴代守護が使用した。

## (9) 西津・小浜津について

平安時代後期、若狭の公的な海上交通ルートに位置付けられていた気山津は衰退し、代わって西津が繁栄してくる。鎌倉時代には、多烏浦の徳勝は北条得宗の名において「国々津泊関々」の自由な通行を保証した船の旗章を与えられていた。

小浜が文献上初めて現れるのは、文永2年(1265)の「若狭国惣田数帳案」「若狭中手西郷内検帳案」で、文献に湊津として登場する初見は、暦応3年(1340)の「室町將軍足利尊氏家執事施行状」に見られる「小浜津問居検納之」である。町名が現れる最も早い例は、第4表のように応安2年(1369)の「中小路」である。

なお、この小浜湊については「若狭国税所今富名領主代々次第」に、応永15年(1408)と応永19年(1412)に小浜に南蛮船が着岸し、特に応永15年は象・孔雀・鸚鵡など珍しい鳥獣類を積載していたとある。これら南蛮船はいずれも問丸本阿弥のところを宿所としているが、問丸は鎌倉・室町時代に港津や都市などに居を構え、荘園の貢租諸物資や商品の運送・保管・売買などに従事した運送業者のことである。

小浜には有力な問丸や刀祢が何人もおり、彼らは領主権力と結びついてその宿所や政所屋となった。後年若狭武田初代信栄が小浜の富有の地下人を誅したというのは、こうした問丸や刀祢を圧伏しようとしたと考えられる。

中世の交易活動は広範囲にわたっていたことが明らかになっているが、永享8年(1436)「奥州十三湊日之本將軍」安倍(安東)康季が羽賀寺の檀越として「巨多之俸」を寄せ、前年に焼失した羽賀寺本堂を再建したことや、寛正4年(1463)若狭守護武田信賢の被官と丹後守護一色義直の被官とが小浜において十三丸と呼ばれる「大船」とその荷物のことで争いを起こして幕府に訴えるということが挙げられる。十三丸という船名が津軽十三湊にちなんだものであると考えられ、北は津軽から南は山陰あたりにかけての日本海沿岸一帯を行動範囲として商品の輸送に従事していたと考えられる。また、麻の原料である青苧の特産地として知られた越後から畿内方面へ運ばれる青苧の荷を積載した廻船もさかんに小浜に着岸し

第4表 京極氏入部までの町名  
 (『わかさ小浜の町並み—旧小浜町町並み調査報告書』より)

年号 (西暦)	町名	関係名称など	典拠
応安 2 (1369)	中小路	道幅	代職預状 (妙楽寺文書)
明応 3 (1493)	石屋小路	五郎左衛門重次	明通寺寄進札
大永 5 (1525)	瀬木	大野外記屋敷、芦原・畠	武田元光判物 (妙光寺文書)
享祿 3 (1530)	八幡小路	新光寺	羽賀寺年中行事
天文 6 (1537)	今小路		慶弥下地売券 (西福寺文書)
	塩浜小路		同上
永祿 11 (1568)	八まんかうし	すいた、又四郎、他	檜垣右京古記 (『拾椎雑話』)
元龜 4 (1573)	松寺小路		歴代綱要記 (願慶寺文書)
天正 4 (1576)	いしやかうし		檜垣右京古記 (『拾椎雑話』)
	かけのわき	御大工与三衛門	同上
	二つ鳥居	彦九郎、御大工孫兵衛	同上
	新町	孫兵衛	同上
	鶉羽小路	小島与三左衛門尉	同上
	八まん小路	吹田左橋兵衛	同上
	さんのかうし		同上

た。海産物は単に年貢や商品として輸送されたばかりではなく、都人への進物としても用いられ、守護若狭武田氏やその被官人らは朝廷・幕府・公家に対して「美物」を送っている。

近世になり小浜は敦賀とともに北国と畿内とを結ぶ流通の結節点として発展を遂げた。それを担ったのが初期豪商で、領主権力との強い結びつきのもとで海運と商業とによって富を蓄積していった。初期豪商には組屋・木下・古関を挙げることができ、組屋氏は豊臣政権の米を津軽で受け取り、その販売と運送を行い、秀吉の朝鮮出兵に際して兵糧米を朝鮮への前線基地であった肥前名護屋に運送している。

小浜湊が最も繁栄したのは17世紀後半から18世紀初頭にかけてで、その後は衰退していくが、その最大の原因は河村瑞賢による西廻航路が開発されたため、この時期以降小浜や西津に北前船の船主が現れる。北前船の基本的性格は買積船であるが、幕府の米である城米、藩の米である蔵米を運送する賃積みも行った。代表的な北前船船主に西津の古河屋嘉太夫がおり、古河屋の船は、松前、酒田、越前の三国・敦賀、若狭小浜、大坂など西廻り航路の湊々において確認できる。古河屋は松前の海産物や東北・北陸の米等を小浜へ、そして京阪へ集散する廻船業を生業とし、酒、醤油の醸造、金融業を兼業し藩の御用達をつとめた。旧古河屋別邸附庭園(護松園)は業績の最盛期を迎えた五代嘉太夫教宜の代、文化12年(1815)



に営んだ邸宅である。なお、この節の最後に、第5表として小浜湊と後瀬山城跡の関係を整理したので参照いただきたい。

#### (10) 小浜城下町について

関ヶ原合戦ののち京極氏けいちょうが入部し、慶長6年（1601）小浜城の築城を開始した。それまでは後瀬山上に城郭を設けていたのを北川と南川の河口の中州に立地を移した。小浜城の建設は京極氏から酒井氏しょうほうに受け継がれ正保2年（1645）頃一応の完成を見ている。

町割りについては、築城開始とともに武家屋敷と町家の整備が開始されている。それまでの後瀬山山麓の守護居館を中心とした武家・町家混在の町割りを廃し、小浜城を囲む北と南に武家屋敷を、さらにその周囲に町家や寺町を配する町割りとした。城の北側（西津側）では城に近い西津橋詰には重臣の屋敷が見られ、西津村に近い山際には足軽長屋を配している。また、南川にかかる大手橋から西方を町人地じょうきょうとしている。貞享元年（1684）の町割りでは、東西2組であったのが東・中・西の3組に編成され52組となった。明治7年（1874）旧52町はいくつかの町が集合あるいは分割され、全国の有力な24の神社の名前を冠した区に編成された。

小浜の旧市街地は比較的良好に旧来の姿を残しており、城下町の構成を現在でもかなり読み取ることができる。小浜西組は丹後街道が通る街道沿いの町場が中心で、これに寺町と茶屋町を加えた地域である。小浜の町並みの特徴として、海岸線の傍にまで山麓の迫った制約の多い土地に、寺社を巧みに配しながら住宅の生活環境を良好に維持していること、伝統的な様式そのままの家屋が多く残っている訳ではないが、旧状をイメージできるだけの骨格は十分に遺っていること、街路網は三丁町西端と八幡神社前の拡幅等一部を除いてほぼ近世の体系を受け継いでおり変化に富んでいることが挙げられる。

第5表 小浜湊・後瀬山城関係年表

年号（西暦）	小浜湊関係	後瀬山城関係
文永2年（1265）	小浜の名の初見	
暦応3年（1340）	幕府、斯波高経に対し臨川寺領加賀国大野荘年貢を小浜津の問居に検納させる	
貞治3年（1364）	税所今富名を山名時氏が獲得し、政所屋と宿をそれぞれ問の心性と道性のもとに置く	
明德2年（1391）	若狭守護一色範光の被官ら、小浜の問の左衛門三郎の宅を宿とし政務を執る	
応永15年（1408）	南蛮船が入津、象が上陸	
応永19年（1412）	南蛮船が入津、問丸本阿弥の元に宿泊する	
応永28年（1421）	若狭税所又代官長法寺道圭、小浜問丸の訴訟により罷免される	

年号（西暦）	小浜湊関係	後瀬山城関係
宝徳3年（1451）	小浜八幡放生祭・上下宮神事の人夫を太良荘民が怠ったところ、守護が報復のため荘民の小浜の出入りを禁止する	
寛正2年（1461）	武田氏被官と一色氏被官が舟荷物について相論する	
寛正4年（1463）	小浜に入港した十三丸と呼ばれる大船とその積荷をめぐり、武田信賢の被官と丹後守護一色義直の被官とが相論	
寛正6年（1465）	幕府、対馬守護宗成職の進物船が小浜湊に着岸したときの取り計らいを、小浜代官伊賀次郎左衛門尉に指示	
応仁2年（1468）	大浜津（小浜津か）守護代官左衛門大夫源義国が朝鮮に使者を送り、宗貞国を通じて接待を求める	
文明元年（1469）	小浜の間丸中西次郎衛門が今富荘内小石丸名を池田孫右衛門尉定員なる人物に売却	
文明2年（1470）	京極持清、出雲美保関役を無沙汰の隠岐の廻船については小浜で徴収すると出雲守護代尼子氏に告げる	
文明6年（1474）	小浜に着いた越後青苧の割符の相論中は、小浜代官内藤佐渡入道が青苧を管理するよう幕府が命じる	
文明10年（1478）	周防の大内政弘より幕府へ贈られた唐物が小浜湊に着く	
文明16年（1484）	丹後守護一色義直、幕府より小浜支配を認められる	
文明18年（1486）	後土御門天皇、禁裏料所小浜の支配について一色義直をやめ武田国信に命じる	
永正3年（1506）	小浜の絹屋主計、伯耆国商人の国屋又四郎への支払いに宛てる割符の保証人になる	
大永2年（1522）		武田元光、後瀬山に築城する
大永3年（1523）	小浜代官粟屋元隆、青苧座本所の三条西実隆の依頼を受け越後の青苧船を小浜津に留置き、本所への上納金を要求する	
大永6年（1526）		武田元光、細川高国の要請で大軍を率いて上洛

年号（西暦）	小浜湊関係	後瀬山城関係
大永7年（1527）		武田元光軍、将軍義晴・細川高国方として京都西七条川勝寺で三好・柳本軍と戦い多くの家臣を失う
享禄元年（1528）	武田元光、小浜公用を朝廷に納入する	
享禄4年（1531）	若狭3郡の百姓代表が、小浜塩浜小路紙屋を本拠として武田氏に徳政を愁訴し認められる	
天文4年（1535）		武田氏、丹後田辺城を攻撃する
天文7年（1538）		重臣栗屋元隆の叛乱、武田信豊が谷田部谷田寺にて鎮圧する 武田信豊が若狭守護となる
天文20年（1551）		丹後国加佐郡衆が郡内所々に城郭を構えて武田氏と戦う
天文21年（1552）		栗屋一族の牢人衆栗屋右馬允、遠敷郡に攻め入り武田信方と戦って敗北
天文22年（1553）		丹波内藤氏の要請に応じ、丹波桑田郡野々村に出陣
永禄元年（1558）		武田信豊と子の武田義統が争う
永禄2年（1559）		武田信豊と武田義統が和解 武田義統が若狭守護となる
永禄4年（1561）		武田義統の軍と逸見昌経、大飯郡和田で合戦
永禄8年（1565）	観世小次郎信光、小浜塩浜小路で勧進能を興行	
永禄9年（1566）	武田義統に対し子の元明を擁する軍勢が小浜を攻撃する	足利義秋が武田義統を頼り若狭に赴く
永禄10年（1567）		武田義統没 武田元明が若狭守護となる
永禄11年（1568）		越前朝倉氏が若狭に侵攻し、武田元明を越前へ連れ去る
永禄12年（1569）		廻国中の連歌師里村紹巴、後瀬山城下の守護館を訪れる
天正2年（1574）		丹羽長秀が若狭を領する
天正10年（1582）		武田元明、近江海津法雲寺で殺害される

年号（西暦）	小浜湊関係	後瀬山城関係
天正 11 年 (1583)	丹羽長秀、小浜の桑村氏の船公事家役を免除・羽柴秀吉、小浜の木下和泉に西路までの塩 100 石の輸送を命じる	
天正 13 年 (1585)	羽柴秀吉、小浜の木下和泉に加賀へ米の輸送を命じる	丹羽長重が若狭を領する
天正 15 年 (1587)	小浜湊に豊臣氏上米が入津、日本海側諸国の入津米が小浜蔵米宿に納められる	浅野長吉が若狭を領する
天正 16 年 (1588)	若狭に約 1 万石の豊臣氏蔵入地が設定される	
文禄 2 年 (1593)	浅野長吉、小浜の組屋と古関に米 3 千石と大豆 1 千石の肥前名護屋への輸送を命じる	浅野長吉が甲斐に転封され、替わって木下勝俊が小浜に、木下惟俊が高浜に入る
文禄 4 年 (1595)	小浜の組屋源四郎、豊臣政権の米を津軽で請け負い、その輸送と売却にあたる 小浜塩屋甚右衛門、太閤板を敦賀に輸送	
慶長 5 年 (1600)		関ヶ原の戦いの功により、京極高次に若狭一国与えられる
慶長 6 年 (1601)		京極高次、後瀬山城を廃して雲浜の地に小浜城の築城を開始する 合わせて城下町の整備に取り掛かる
寛永 17 年 (1640)	西津侍町と漁師町との間に幅 30 間の火除け地を設ける	
貞享元年 (1684)	城下の町割り改められる	
安政 5 年 (1858)	広小路に水路（堀川）を設けて火除け地とする	

### 第 3 節 社会的環境

小浜市は県庁所在地である福井市までは約 75 km、京都市までは約 50 km と京都市に近いことからわかるように近畿地方との繋がりが強く、古くから文化や経済の影響をこれらより強く受けてきた。現在は舞鶴若狭自動車道が開通し、関西圏・中京圏との繋がりが強化されてきている。また、北陸新幹線の敦賀以西は小浜ルートに決定したことにより、小浜－京都間は最短 19 分で移動できるようになり、関西圏との繋がりがより密接になると考えられる。

小浜市内全域の人口は昭和 20 年代の 39,000 人台をピークとして徐々に減少し、昭和 30 年代中頃には第 6 表のように 35,000 人台まで減少した。その後も人口は減少を続け、昭和 40 年代中頃以降は 33,000 人台で推移していたが、平成 17 年には 32,000 人台を割る状況となっている。『小浜市人口ビジョン』によると、平成 22 年時点の 15 歳未満の年少人口割合

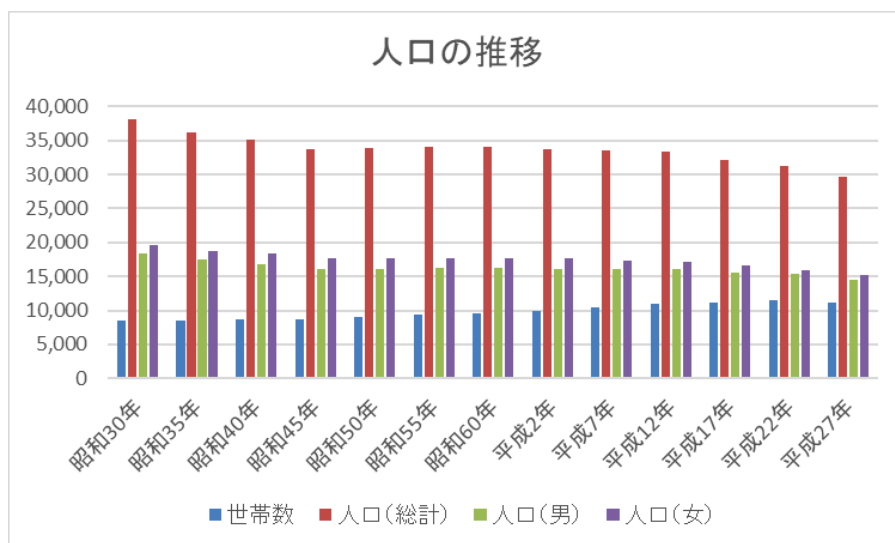
は 13.6%、15～64 歳の生産年齢人口割合は 58.5%、65 歳以上の老年人口割合は 27.9%となっており、年少人口と生産年齢人口割合は一貫した減少傾向、老年人口割合は一貫して増加している。

小浜市内全域の世帯数は昭和 60 年の 9,500 世帯から増加を続け、平成 12 年以降は 11,000 世帯とやや伸びが鈍化している。

第 6 表 人口・世帯

年次	昭和 30 年	昭和 35 年	昭和 40 年	昭和 45 年	昭和 50 年	昭和 55 年	昭和 60 年
世帯数	8,422	8,479	8,611	8,716	9,079	9,474	9,584
人口(総計)	38,058	36,236	35,160	33,702	33,890	34,049	34,011
人口(男)	18,430	17,475	16,777	16,014	16,141	16,300	16,309
人口(女)	19,628	18,761	18,383	17,688	17,749	17,749	17,702

平成 2 年	平成 7 年	平成 12 年	平成 17 年	平成 22 年	平成 27 年
9,919	10,391	10,965	11,136	11,477	11,220
33,774	33,496	33,295	32,182	31,340	29,670
16,175	16,164	16,137	15,620	15,376	14,539
17,599	17,332	17,158	16,562	15,964	15,131



(『平成 28 年度 小浜市統計書』より (国勢調査時のデータのみ集計))

小浜市の土地は第 7 表のように山林原野が多く、その中を北川と南川の 2 大河川が小浜湾に向け流れている。この河川の堆積作用によって形成された狭小な平野部に市街地が形成されている。河川に沿った細長い平地や中小河川の谷あい地、海岸部には農林水産地域が広がっている。

小浜市には多くの資源があり、<sup>みょうつう</sup>明通寺本堂・三重塔などの国宝・重要文化財建造物や羽

第7表 地目別土地面積

年次	総数	田	畑	宅地	山林	原野	雑種地・他
昭和 62 年	13,377.2	1,818.0	308.4	509.4	7,560.4	183.8	2,997.2
昭和 63 年	13,379.3	1,808.8	304.9	517.6	7,547.4	183.1	3,017.5
昭和 64 年	13,381.9	1,796.3	302.9	525.9	7,510.3	182.7	3,063.8
平成 2 年	13,384.0	1,786.0	300.4	533.0	7,497.8	181.0	3,085.7
平成 3 年	13,388.7	1,774.1	298.1	544.2	7,498.5	180.2	3,093.6
平成 4 年	13,391.5	1,763.4	297.2	556.0	7,489.5	180.2	3,105.2
平成 5 年	13,395.2	1,756.2	294.4	563.9	7,477.8	180.2	3,122.7
平成 6 年	13,403.2	1,747.3	292.9	572.1	7,477.7	180.4	3,132.8
平成 7 年	13,397.9	1,739.0	291.2	578.7	7,457.1	179.5	3,152.4
平成 8 年	13,404.0	1,734.5	290.3	584.7	7,454.5	179.0	3,161.1
平成 9 年	13,404.8	1,645.9	244.9	607.0	7,487.9	151.0	3,268.0
平成 10 年	13,404.2	1,642.1	244.6	616.6	7,487.0	150.9	3,267.0
平成 11 年	13,415.3	1,636.5	243.4	622.5	7,460.5	151.00	3,301.5
平成 12 年	13,431.1	1,632.4	245.9	627.5	7,446.2	150.9	3,307.9
平成 13 年	13,437.7	1,629.4	243.8	632.4	7,469.7	152.0	3,310.4
平成 14 年	13,446.8	1,619.4	241.7	642.3	7,472.9	151.9	3,318.6
平成 15 年	13,477.0	1,615.3	241.6	645.7	7,459.5	152.2	3,362.7
平成 16 年	13,476.9	1,611.3	241.1	647.3	7,452.4	152.8	3,372.0
平成 17 年	13,480.6	1,602.2	245.8	652.5	7,428.9	151.3	3,399.9
平成 18 年	13,482.4	1,598.3	244.6	655.3	7,370.4	151.5	3,462.3
平成 19 年	13,485.2	1,593.8	243.8	660.1	7,410.4	151.6	3,425.5
平成 20 年	13,489.0	1,576.6	242.9	621.7	7,390.6	151.9	3,505.3
平成 21 年	13,490.6	1,573.9	242.4	625.7	7,381.3	151.5	3,515.8
平成 22 年	13,491.1	1,571.0	243.2	627.5	7,349.5	150.8	3,549.1
平成 23 年	13,492.5	1,558.2	242.6	629.6	7,341.6	150.8	3,569.7
平成 24 年	13,495.2	1,546.2	242.2	631.9	7,317.5	149.5	3,607.9
平成 25 年	13,497.2	1,535.2	242.0	632.9	7,310.1	150.3	3,626.7
平成 26 年	13,498.9	1,531.1	242.5	638.8	7,308.7	149.9	3,627.9
平成 27 年	13,499.8	1,526.9	241.2	641.4	7,308.5	149.0	3,632.8

(『平成 28 年度 小浜市統計書』より)

賀寺木造十一面観音菩薩立像などの美術工芸品を見学する観光客、谷田部ネギや若狭グジなどの農作物・海産物を食べるために訪れる人々、名勝若狭蘇洞門や萬徳寺庭園など景色を楽しみに訪れる方々などに大きく分けることができる。平成 20 年 6 月に重要伝統的建造物群保存地区に選定された小浜西組では三丁町を中心に家屋の修理などが進み、観光拠点として重要な役割を果たすまでになっている。

なお、小浜市では 3 駅構想を策定しており、舞鶴若狭自動車道に隣接する道の駅、旭座を中心とするまちの駅、フィッシャーマンズワープを中心とする海の駅を中心に集客を図っている。観光客数の推移等については、第 8・9 表を参照いただきたい。

若狭湾沿岸の海岸線は典型的なリアス式海岸で、屈曲に富んだ海岸線を形成している。その代表が名勝若狭蘇洞門である。また、暖地性常緑樹を中心とした豊かな植生が展開しており、蒼島暖地性植物群落はナタオレノキやムサシアブミなど暖地性植物の北限となっている。

第8表 観光客別県外観光客数

年次	県外観光客(人)					計
	関西地方	中京地方	関東地方	北陸地方	その他	
平成23年	680,113	226,133	74,064	52,900	76,340	1,109,550
平成24年	634,500	265,150	105,900	65,800	56,950	1,128,300
平成25年	618,150	256,150	106,450	89,400	86,550	1,156,700
平成26年	607,500	297,200	97,200	109,000	96,100	1,207,000
平成27年	623,400	212,500	65,300	97,700	91,300	1,090,200

(『平成28年度 小浜市統計書』より)

第9表 年別観光客入込数および観光消費額

年次	観光客数		観光消費額	
	総数(人)	うち宿泊(人)	総額(千円)	うち宿泊(千円)
平成14年	953,600	186,100	4,302,114	2,710,729
平成15年	1,628,900	232,200	5,849,032	3,403,637
平成16年	1,442,100	—	7,129,900	5,472,890
平成17年	1,444,800	220,100	6,874,620	5,508,049
平成18年	1,505,100	218,600	7,198,362	5,436,918
平成19年	1,540,200	278,110	8,401,607	6,671,941
平成20年	1,712,330	343,800	9,287,179	7,191,005
平成21年	1,610,250	222,700	7,882,646	6,058,875
平成22年	1,341,600	312,400	9,136,539	7,679,257
平成23年	1,423,000	309,660	9,487,813	7,944,727
平成24年	1,443,300	235,900	8,341,771	6,612,337
平成25年	1,486,100	209,500	7,634,632	5,806,078
平成26年	1,672,700	218,300	8,205,710	6,067,362
平成27年	1,615,900	211,800	8,007,184	5,862,308
合計	20,819,880	3,199,170	107,739,109	82,426,113

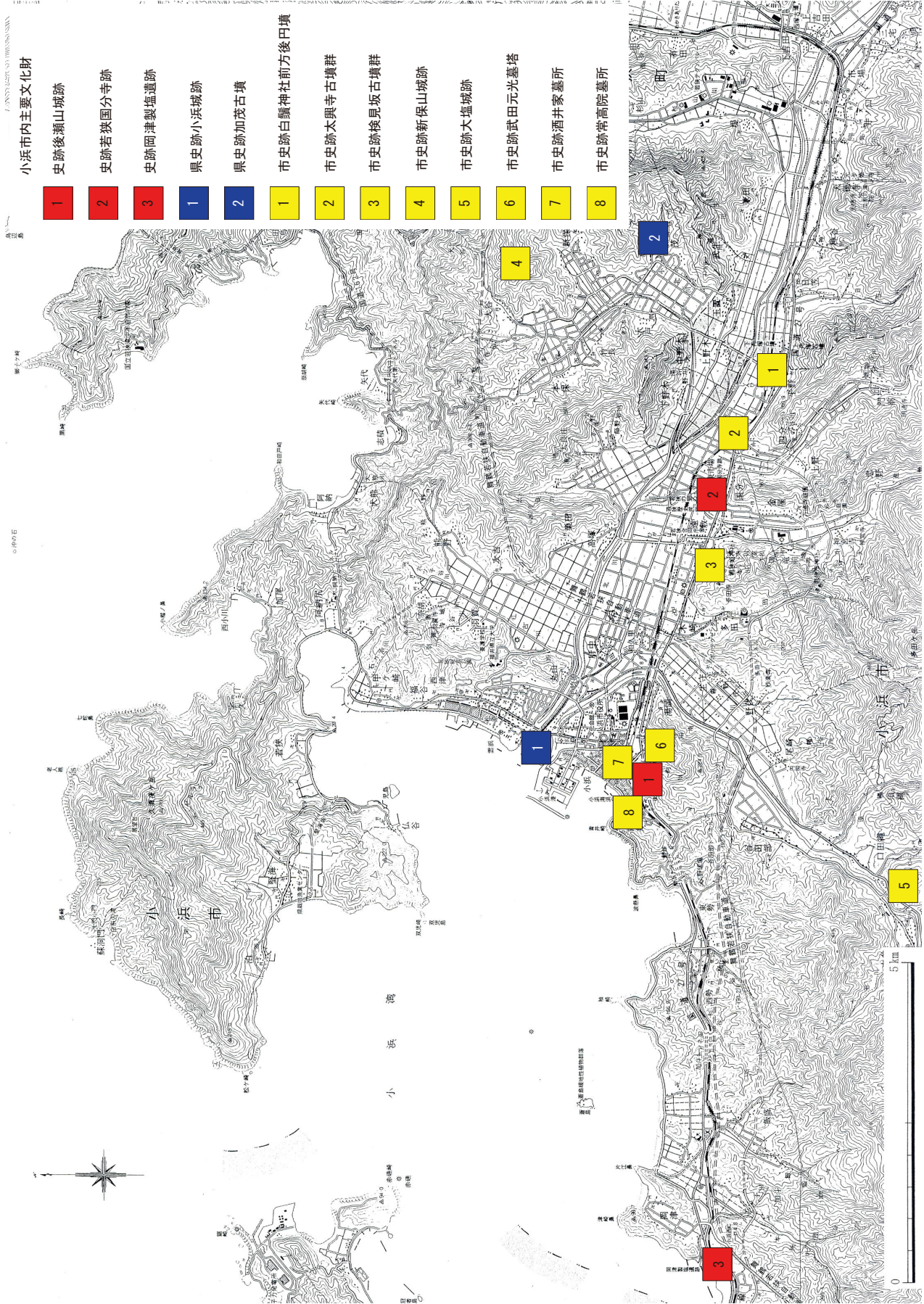
(『平成28年度 小浜市統計書』より)

小浜市は奈良市、川越市などと姉妹都市関係にあり、奈良市とは「お水送り」と「お水取り」の関係などで、川越市は江戸時代小浜に入部するまで酒井家が治めていた関係で交流を続けている。

小浜市は「食のまち」を標榜しており、市内阿納のブルーパーク阿納では釣った魚をさばくまでを体験できる。小浜市御食国若狭おばま食文化館では若狭塗箸の研ぎを体験することができ、キッチンスタジオでは料理を作ることができる。

#### 第4節 文化財

平成30年11月現在、小浜市には国指定文化財65件(うち国宝2件)、県指定文化財74件、市指定文化財116件がある。(合計255件)これは全国的に見ても文化財が多く集積していると言え、「海のある奈良」と称される所以である。なお、小浜市内の史跡については第7図、全ての文化財については巻末の『資料編』1に一覧表としてまとめた。



第7図 小浜市内文化財（史跡）位置図